

国と異なり、ベトナム王朝が、遅くとも15世紀には、明確な版図の意識を持ち、それを県や州といった行政単位の集合体と認識し、国土に隣接する地方を明確に把握し、地誌や地図に記述してきた点(『洪徳版図』)をすぐに指摘できよう。ここでは、18世紀末から19世紀にかけてベトナムの国土の記述について検討する。

1. 州・県の集合体の外延が拡大し、ほぼ現在の国土と重なるのは、1830年代、阮朝のミンマン帝時代の後半になってからのことである。ミンマン帝は、フエを国土の中心として確定し、長らく分裂していた南北の空間の支配を一元化した。また、国土の視覚化(各地の「絵図」)や実証的な把握(北極高度、風雨尺・寒暑尺)を目指した。1838年に中国古代の禹に倣って王朝の宝器として九つの鼎を鑄造させたが、これには、北から南までの国土の山川や物産が描かれた。同年、ミンマン帝は、この新たな国土を「大南」と名付けている。1882年によりやく草稿の完成した『大南一統志』は、この国土の省、州・県を隈無く記述しようとするものであった。

2. 「大南」の隣接地の記述について見ると(1861年『大南一統輿圖』)、中部高原のフロンティアでは隣接する国があいまいである(「蛮洞」)のに対して、西北山地を含む他のフロンティアでは隣接する国に関する意識が明確である(北方では「清國」、西方は「南掌」「暹羅」「高蛮」)。植民地化直後に阮朝が編纂した『大南國疆界彙編』七卷(1886-1888年)にも同様の認識が見られる。

3. 西北山地のシプソンチュータイの地域には、15世紀には州と県が設置されており、18世紀にはベトナム王朝の中国に対する明確な領土的主張も見られる(失地回復要求)。しかし、18世紀末の『興化處風土録』(1778年)は、西北山地が、州・県の枠組みを形式的に受け入れながらも、実際には輔導とよばれるタイ系の首長層の固有の支配空間であり、ベトナムとは別の地域世界(哀牢)に属することを明確に記述している。ミンマン期に始まった州・県へのベト族官吏の派遣(改土帰流)は、州・県という支配の枠組みの強化を目指すものであったが、1844年にはその弊害が指摘され、1869年には停止されている。1860年代には匪賊層が跋扈する中、白タイ族デオ氏が台頭し、既に南圻を失っていた「大南」の国土は西北山地でも危機を露呈した。1888年、奠辺府(ディエンビエンフー)からタイを追い出したフランスは、パヴィイを派遣してデオ氏と結び、シプソンチュータイを獲得する。シプソンチュータイの植民地トンキンへの帰属を決定づけたのは、デオ氏であった。『大南一統志』は、『興化處風土録』を全面的に引用することによって、国土の周辺の実態を間接的に記述している。

資料・研究短報

アイルランガ王碑文の怪ープララヤは1006年か1016年かー

深見純生

カルカッタの考古学の博物館に19世紀初めのイギリス支配下のジャワからもたらされた一個の大きな石碑があるという。高さは124cm、幅は上部で95cm、下部で86cm、表面には37行34詩節のサンスクリット韻文、裏面には45行のジャワ語散文が刻まれている。アイルランガ王(在位1019～42年)の発したものであり、インドネシア史の叙述ではカルカッタス

トーンと呼ばれることが多い。その内容は一言で言えば、アイルランガ王がプチャンガンに庵寺を建立する際に、祖先の系譜と自身の事跡を記すものである。我が国ではクロム著有吉巖編訳『インドネシア古代史』の中で扱われているほか、最近では生田滋氏が昨 1998 年末に刊行された『世界の歴史13 東南アジアの伝統と発展』の中でサンスクリット面を「エルランガ王讃歌」、ジャワ語面を「エルランガ王頌徳碑」と呼んで紹介している。

両碑文は一方が他方の翻訳というのではなく、また時間的に連続するのでもない。一方に書いてあることが他方には記されないことが多く、相補いあってアイルランガの生涯をたどる仕組みになっている。なぜこのような構成を取ったのか、様々な事柄をどのような基準で表面と裏面に割り振ったのか、あるいはそもそもどれほどの歴史的事実をどのように反映しているのか等々、疑問は非常に多い。10世紀末から11世紀前半のジャワ史の再構成においてこのアイルランガ王碑文が死活的な重要性を持つだけに詳細な検討を重ねる必要がある。しかし私は古代ジャワ語もサンスクリットも読めないのに、この問題を正面から扱うことができない。ここでは研究動向の一端を紹介し、あわせて私が最近書いたものへの反省を記しておきたい。なお、アイルランガはジャワ語面の名前であり、サンスクリット面ではエルランガである。

ここで取り上げるのは、ジャワの王国を瓦解させたプララヤ(大破局)はシャカ暦928(AD1006)年か、938(AD1016)年かという問題である。それはジャワ語面第5行目にあり、ケルンの読みでは「シャカ928年のジャワの島におけるプララヤ(大破局)の時」となっている。サンスクリット面(第14詩節)では都が灰塵に帰したことを述べるが、プララヤの語も紀年もない。ケルンはこの碑文のサンスクリット面のローマ字転写と翻訳を1885年に、ジャワ語面のそれを1913年に発表し、両論文は1917年にケルンの『著作集』第7巻に収められた。いま私が見ているのはこの『著作集』第7巻(83-114頁)である。

ケルンの読みが定説になっていたが、戦後ダマー[1952]がその数字「928」は実は「938」であると読みなおした。さらにドゥ・カスパリスは「アイルランガ」と題する、1958年のアイルランガ大学教授就任講演のなかで1016年説を支持している[1958: 10-11]。その後は、相変わらず1006年と記される場合もあるが、1016年とするのが定説となっていた。たとえばセデスの英訳『東南アジアのインド化した諸国家』[1968: 144]、古代史の研究入門書であるファン・ナールスン[1977: 59-60]、古代ジャワ文学研究の金字塔と言われるズットミュルデル『カランワン』[1983: 22]、また『ケンブリッジ東南アジア史』[Tarling 1982 II: 178]など、いずれも1016年としている。私もこの説に従ってきた。

ところが今年1999年になって、ドゥ・カスパリスがケルンの読みを支持する意見を提出した。その根拠は3つある。第一に、インドネシア大学文学部所蔵の拓本を再検討したところ、問題の数字は「3」でなく「2」と読むべきだというものである。すなわち、ダマーはケルンが「2」と読んだ文字の下に「曲がり」の存在が認められるので「3」としたのだが、問題の「曲がり」は数字の一部分ではなく石の傷と見るべきであるという。第二に、サンスクリット面(第14～15詩節)によれば、その後アイルランガは森に隠棲したが、シャカ932(AD1010)年になって、高位のバラモンたちが来て王位に即いてくれるよう懇請したという(この事情はジャワ語面には書かれていない)。これとの時間的整合性からは1016年でなく1006年であるべきである。第三点は、プララヤはシュリーヴィジャヤによる攻撃であろうから、シュリーヴィジャヤをめぐる国際関係から言って1016年よりも1006年がよいというものである。この第三点は具体的な史料の根拠のない推測にすぎないが、第一点と第二点は重

大な指摘と言うべきである。なおバラモンたちがアイルランガに懇請した年をケルンはシャカ932年とするが、ドゥ・カスパリスはシャカ931年としている。

1006年説と1016年説のどちらが正しいかは、専門家による史料自体に則したさらなる検討の結果を待ちたい。したがって私には現在これ以上論ずべきことがないが、一つだけ書き足しておきたい。今年5月末に刊行された池端雪浦編『東南アジア史Ⅱ 島嶼部』のなかで私は1016年説に基づく叙述をしている。さらに64頁では「一〇一六年のプララヤ(大破局、一〇〇六年説は間違い)」と書いている。この「一〇〇六年説は間違い」という断定的な表現はいずれにせよ不適切なので、できるだけ早い機会に少なくとも「一〇〇六年説もある」とでも訂正したいものだと考えている。

【参考文献】

- 池端雪浦編 1999『東南アジア史Ⅱ 島嶼部』山川出版社
- 石澤良昭・生田滋 1998『世界の歴史13 東南アジアの伝統と発展』中央公論社
- クロム・N. J. 著 有吉巖編訳 1985『インドネシア古代史』天理教道友社
- Casparis, J. G. de 1958: "Airlangga", Universitas Airlangga, 23pp. (Pidato Diutjapkan pada Peresmian Penerimaan Djabatan Guru Besar dalam Mata Peladjaran Sedjarah Indonesia Lama dan Bahasa Sanskerta pada Perguruan Tinggi Pendidikan Guru Universitas Airlangga di Malang Jang Diadakan di Malang pada Hari Saptu Tgl. 26 April 1958)
- 1999: "Airlangga: The Threshold of the Second Millennium", *IIAS Newsletter*, No.18, p.30.
- Coedes, G. 1968: *The Indianized States of Southeast Asia*, Honolulu.
- Damais, L.-C. 1952: "Etudes D'epigraphie Indonesienne III. Liste des Principales Inscriptions Datees de l'Indonesie", *BEFEO* 46-1: 1-105.
- Kern, H. 1885 & 1913: "De steen van den berg Penanggungan (Surabaya), thans in 't Indian Museum te Calcutta. Met Sanskrit-inscriptie en Oudjavaansche inscriptie van 963 Caka; ter eere van Vorst Er-langga", in H. Kern, *Verspreide Geschriften*, VII(1917): 83-114.
- I (1885). (Voorzijde van den steen te Calcutta) Sanskrit-inscriptie ter eere van den Javaanschen Vorst Er-langga.
- II (1913). (Achterzijde van den steen te Calcutta) Een Oud-Javaansche steen-inscriptie van Koning Er-langga.
- Naerssen, F. H. van and R. C. de Jongh 1977: *The Economic and Administrative History of Early Indonesia*, Brill, Leiden and Koln.
- Tarling, N. 1992: *The Cambridge History of Southeast Asia*, 2 vols., Cambridge University Press.
- Zoetmulder, P. J. 1983: *Kalangwan: Sastra Jawa Kuno Selayang Pandang*, Jakarta.